



2026年（令和8年）
3月号（No. 970）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

全国山岳古道調査プロジェクト報告④

ホームページ上で57古道を发表済み
全120古道の掲載完了は27年に

近藤雅幸

間もなく90古道を掲載予定

2025年の完成を目標に、日本山岳会創立120周年記念事業の目玉として始められ、4年以上の期間にわたって進めてきた「山岳古道調査プロジェクト」ですが、会員や各支部、さらに外部で協力していただいた方たちの調査活動により、なんとか120古道のうち57の古道の記事をホームページ（HP）に掲載することができました。

しかし、創立120周年記念事業として進められてきたにもか

わらず、120周年の年である25年を過ぎて道半ば。やっと120古道の半分に近づいてきただけで、HPは今の時点でもまだ完成していません。まずは、山岳古道調査の成果を期待され、楽しみにしていた多くの会員の皆さんに、このことをお詫び申し上げます。現時点では、57の古道がすでにHPに掲載済みですが、残りについても、地図が完成すれば掲載できるといものが25ほど、進行中のもも含めると90以上の古道が間もなく掲載になるはず。一方、原稿そのものが届いていない

目次

ホームページ上で57古道を发表済み
全120古道の掲載完了は27年に……1

『民族植物学入門』を上梓……5

徳本峠クラシック・ルートに再び灯を
岩魚留小屋再生プロジェクト始動……6

小説『登山大名』に描かれた
九重・大船山に眠る中川久清公……8

山の名著再読……10

追悼……12

支部だより……13

図書紹介……15

会務報告……17

ルーム日誌……18

会員異動……18

INFORMATION……18

新入会員……19

編集後記……19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月～金……10～20時
第1、第3、第5土曜日……10～18時
第2、第4土曜日……閉室
*閉室日の電話受付時間 10時～16時

という古道も10いくつあり、古道によつて進捗状況にばらつきがあるというのが現状です。

地図は今後、道や目標物が変わっても修正できるよう情報別にレイヤを重ねる手法で作っているため、それができる1人のプロジェクト・メンバーに全てを頼っています。そのため、どうしても地図作製は進捗が遅れぎみになります

が、別の言い方をすると、後は地図さえ完成すれば、HPに掲載できるので、後は地図のみということ、は、ゴールが目の前に見えている状況と言えます。一方、原稿が届いていない所、再度調査が必要な古道、行ってみたらHPに掲載できるような古



鹿角街道を地元の方々と調査する

道ではなかった別の古道に差し替えを検討している所など、まだまだ時間が掛かりそうな古道もあります。

コロナ禍や支部会員の高齢化が遅滞原因に
いずれにしても、目標としていた25年に間に合わなかったことは確か、なぜそうなってしまった

山岳古道の価値後世へ

全国団力所 歴史調査し書籍化へ

日本山岳会

道内は殿様街道と増毛山道

調査するのは、食料も燃やした、冬道でも、道内は殿様街道と増毛山道。調査は、山岳会が中心で、全国の山岳会が協力している。調査は、山岳会が中心で、全国の山岳会が協力している。調査は、山岳会が中心で、全国の山岳会が協力している。



道内は殿様街道と増毛山道。調査は、山岳会が中心で、全国の山岳会が協力している。調査は、山岳会が中心で、全国の山岳会が協力している。

のか、ここで考えてみたいと思います。

本プロジェクトは、20年夏に日本山岳会創立120周年記念事業の目玉の一つとして立ち上げられました。完成予定は25年、創立120周年の年をターゲットに、日本全国の山岳古道を支部を中心に踏査し、その成果をHPに発表、書籍としても世に公表するというものでした。20年というと、コロナ禍が始まった年です。プロジェクト

トを開始したのが、コロナ禍による活動制限が解除された始めたころだったと言え、やはり調査を行なうにも手かせ足かせをはめられた状況が、プロジェクト開始から3年間続きました。会員の高齢化による影響も大きかったと思います。20年前、創立120周年記念の中央分水嶺踏査のような、支部を中心として調査を行なう手法も、高齢化が進んだ一部の支部では調査に携われる会員が不足しているため、思うように進めることができませんでした。

その対策として、比較的年齢が若い本部同好会のマウンテン・カルチャー・クラブ(MCC)の協力によってかなり多くの古道の調査を行なうことになりましたが、支部を主体にという当初の目論見は崩れてしまいました。

2021年10月3日付、北海道新聞に載った本プロジェクトの記事

より安全なコース紹介と精度の高い情報をHPと書籍で公表

調査を進めていくうちに別の問題も出てきました。当初は見捨てられた古道、歩かれなくなった古道を採り上げたいと考え、それを協力してくれた会員の皆さんにも説明していました。しかし、実際に調査してみると、そのような道は一般のハイカーに歩いてもらうためにはあまりにも危険が多く、果たしてHPや書籍で公表しているものか。それを見て古道を歩いたハイカーが事故を起こしてしまっているのではないかと、そんな危惧が脳裏に浮かびました。

したがって、120の古道には、今も歩かれている安全な道を選ぶことになっていきます。その結果、いったん120選に選んだ古道でも、調査の結果、その中に入れられないという判断になるものが出てきています。昨今の異常気象もそれに拍車を掛け、大雨のための土砂崩れで歩けなくなった古道を別の古道に差し替えることも出てきました。

こういったことの積み重ねと、当初考えたHP作成のために必要

な時間をマンパワーとの兼ね合いで見誤ったことによって、目標の時間に間に合わなくなったのだと考えます。

そんななかで今、一番の悩みはマンパワー不足です。山に行つて調査をする人はたくさんいたのですが、それを文章化し、写真や各種データを整理分類し、HPに上げる作業を行なえる人は数えるほどしかいません。それによって特定の担当者に作業が集中しており、作業が遅れてしまう。そんな悪循環が延々と続いている状況と、限られたマンパワーのリソースで残りの作業を続けていかなければならないことを、会員の皆さんにもどうかご理解いただきたいと思えます。

HP掲載完了は27年に延期

本プロジェクトでは、現在の進捗状況を評価したうえで、人的資源を考慮しながら協議を重ねた結果、HPの掲載完了の目標を27年に延期することにしました。さらに、書籍についてはHPを基に作業に掛かるので、さらにそれより1年ほど後と見込んでいます。

今回の延期は、単に作業を遅ら

せるのではなく、より正確な古道の情報の提供、安全なルートを紹介、分かりやすいHPの作成など、2年という時間を費やすに値する、より質の高い成果を目指して取り組んでいこうと思っています。

書籍についても、見やすく、分かりやすく、楽しい紙面を目指しています。イラストや写真をふんだんに使った紙面を作っていくようにして、詳しい情報や蘊蓄はHPに、紹介やガイドは書籍にと目的別に住み分けを行なって、トータルで古道の情報を多くの人に見てもらおうようにしていきたいと思っています。

また、このプロジェクトは目的達成後も引き続き活動が続け、調査および情報の更新を行ない、常に最新の情報を求める人に発信していくようにしていくつもりです。そのような訳で、プロジェクトの完遂まで、いましばらくの猶予をください。

なお、今後の詳細なスケジュールや進捗状況などについては、HP上で逐次報告させていただきます。

（全国山岳古道調査プロジェクトリーダー）

日本の山岳古道120選

No	古道		
北海道			
1	増毛山道・濃屋山道	ロシアの南下対策で開削された幕末の古道	○
2	様似山道・猿留山道	北方警備のための蝦夷地最初の官設道路	○
3	虻田街道 中山峠	開拓期に札幌と函館をつないだ山越えの道	△
4	殿様街道	偉人たちも歩いたアイヌのコタン連鎖道	△
東北			
5	恐山古道	日本三大霊場・恐山菩提寺への道	○
6	岩木山古道	ヤマカゲの参詣道が残る津軽のご神体	○
7	三浦新道と十和田古道	十和田湖に向かう明治の要路と信仰の道	△
8	鹿角街道 車之走峠	七時雨山の牧野を越える歴史の道	○
9	岩手山古道	幾多の道程碑や観音石像が残る信仰の山	○
10	秋田街道 国見峠	岩手・秋田境を越える最短の峠道	○
11	早池峰山古道	人々に崇められ、物語を紡いできた信仰の登拝道	○
12	沢内街道 白木峠	険しくも人々の夢が通った白木嶺道	○
13	仙北街道 十里峠・柏峠	仙台藩と秋田藩を結ぶ深山険阻の難行程	○
14	鳥海山古道	鳥海山古道を修験者とともに歩く	△
15	(欠番)		
16	栗駒古道	ブナ林や湿地が広がる千年の歴史の道	○
17	出羽仙台街道中山越 中山峠・山刀伐峠	「おくのほそ道」で芭蕉が最も難儀した峠越え	山刀伐峠未調査
18	出羽三山古道	死と再生をたどる生まれ変わりの道	作成中
19	出羽の古道六十里越街道・道智道	湯殿山を目指す道で賑わった「ゆどのみち」	原稿未着
20	朝日軍道	上杉景勝が造った長大な山岳縦貫路	○
21	関山街道 嶺渡り古道	陸奥と出羽をつなぐ急峻な峠越え街道	○
22	二口街道 二口峠	仙台と山形を結ぶ重要な最短物流ルート	○
23	蔵王山古道	かつて「忘れずの山」として知られた東のお山	宮城側だけ△
24	万世大路	明治天皇の想い潰えた手摺り隠道の道	○
25	飯豊山古道	福島「ハその緒」となった山岳登拝の山	△
26	太閤道 勢至堂峠・背炙り峠	太閤秀吉が造らせた奥州仕置き道	○
北陸			
27	越後米沢街道 十三峠	13の峠を越えた歴史的な街道	○
28	会津街道 諏訪峠・鳥井峠・車峠・束松峠	越後山脈の横谷に切り開かれた街道	間もなく○
29	佐渡三山駆け	子を背負って駆けつけた信仰の道	○
30	八十里越え	縄文に遡る奥会津と越後を結んだ歴史の道	○
31	六十里越え	浅草岳の南をたどった豪雪地の山越え	○
32	越後銀の道 枝折峠	ダムに眠る鉱山の町へと続く銀山街道	○
33	三国街道 三坂峠・三国峠・清水峠	上杉謙信が関東遠征でたどった道	△
34	六左衛門道	六左衛門翁が拓いた謎多き古道	○
35	石動山 多根道	いにしえより続く石動山信仰の道	○
36	さらさら越え	真冬に北アを越えた武将の伝説ルート	○
37	立山参拝道	標高差2500mを歩む信仰と大自然の道	○
38	小白川道	小瀬峠を越え飛騨に至る交易と塩硝の道	間もなく○
39	白山禅定道	三国から登拝する白山の三禅定道	○
40	蠅帽子峠	水戸天狗党が決死の覚悟で越えた峠	○
41	北陸道 木の芽峠	古代から1000年にわたり機能した官道	○
関東			
42	会津中街道 大峠	標高1486mを越えた短命の街道	福島側は△
43	沼田会津街道 尾瀬越え	尾瀬越えのいちばん古い道	△
44	西沢金山への道	ゴールドラッシュを偲ぶ奥日光の峠越え	原稿未着
45	三峯五禅頂の道	再興された日光修験の道を追体験	原稿未着
46	赤城山古道	四方八方から延びる赤城山参詣の道	△
47	榛名山古道	多様な信仰が混在する霊峰榛名への道	○
48	筑波山古道	「西の富士、東の筑波」と並び称された信仰の山	△
49	十文字峠越え	樹林に囲まれた交易と信仰の道	○
50	秩父往還 雁坂峠	日本武尊伝説が残る甲州と武州の重要路	○
51	三峰山参詣道	三峰神社表参道から大陽寺参詣道を歩く	○

No	古道		
52	子の権現・高山不動	奥武蔵に張り巡らされた信仰と交易の道	○
53	日原杖父往還と奥多摩浅間の道	奥多摩に残る富士山信仰の道	原稿未着
54	鎌倉街道 山の道	畠山重忠がたどった峠越えの街道	作成中
55	武州御嶽山	お犬様信仰が残る江戸の西の護り	作成中
56	古甲州道 浅間尾根・大菩薩峠	関東から甲州へと尾根道をたどる中世の幹線路	原稿未着
57	鹿野山古道	関東最古の名刹・神野寺に至る参拝道	○
58	相州大山古道	修験者や江戸庶民が歩いた信仰の道	○
59	足柄古道	奈良・平安時代の面影が伝わる足柄峠越え	○
60	箱根旧街道	東西交流を支えた箱根八里の石畳の道	○

中部・東海			
61	塩の道・千国街道 地蔵峠・大綱峠	牛馬や人が塩を担いで運んだ生活の道	△
62	戸隠山古道・高妻山古道	北信にそそり立つ岩山から孤高を誇る修験の山へ	原稿未着
63	善光寺古道 栢山峠	物資移送にも欠かせない善光寺詣りの道	○
64	上高地みち	上高地を挟んで飛騨と信濃を結ぶ2つの峠	○
65	中山道 碓氷峠	関東から信州へ越える中山道最初の峠	○
66	東山道 保福寺峠	ウェストンが感動した北ア展望の古代の峠	○
67	中山道 和田峠	五街道中、最も奇酷と言われる峠越え	○
68	鯉街道 野麦峠	飛騨の若い娘たちが吹雪の中を命懸けてたどった難所	△
69	金峰山 御嶽道	五丈石をいただき甲府盆地を睥睨する奥秩父の盟主	原稿未着
70	木曾御嶽山古道	御嶽古道は聖なる山への山岳信仰の道	△
71	権兵衛街道 権兵衛峠	古畑権兵衛が開削し、伊那谷と木曾谷を結んだ峠	作成中
72	東山道 神坂峠	日本武尊伝説に触れる古代の道	△
73	南アルプス北部山岳古道	甲斐の人々が湯治に向かった峠越えの道	原稿未着
74	伊奈街道 三伏峠・転付峠・十谷峠	明治初期に開削された南アルプス越えの街道	今年調査予定
75	御坂みち・若彦路・中道往還	甲府盆地と富士山麓をつなぐ御坂山塊越え	○
76	富士山古道	霊峰富士に登拝した江戸時代の信仰の道	△
77	身延山古道・七面山古道	日蓮宗の修行と祈りの道	△
78	秋葉街道 小川路峠・青崩峠	中央構造線をたどる「南の塩の道」	△
79	大日古道	水没した井川集落と静岡を結んだ生活路	○
80	飯田街道 伊勢神峠	馬の背で塩を運んだ街道	原稿未着

近畿			
81	鈴鹿越え古道 千草越え・八風峠	近江商人が利用した鈴鹿山脈越えの峠道	滋賀側のみ原稿未着
82	大和から伊勢への道 高見峠	和歌山から通じる伊勢南街道の最難所	コラム追加のみ
83	吉野みち	飛鳥・宇陀野と吉野を結ぶ5つの峠道	原稿未着
84	葛城修験の道	修験道の始まりの道	原稿未着
85	高野山 七口	千年の歴史をたどる霊場への参詣道	3/7時点で△
86	熊野古道	世界遺産になった熊野詣での山岳古道	原稿未着
87	大峯奥駈道	今も修験が続く大峰山脈を貫く山岳路	原稿未着
88	大台ヶ原山 古尾鷲道	松浦武四郎が歩き、登山バスが通った道	原稿未着
89	上北山尾鷲古道	東ノ川を越えて台高山脈を横断する古道	原稿未着
90	鯖街道	若狭から京へ——直線に至る十八里の道	○
91	近江坂	人馬が往来したブナ原生林の尾根道	○
92	比叡山回峰行者道	天台宗総本山、今も生きる回峰行者の道	解説追加
93	京から近江への峠道 白鳥峠・如意山	京から近江へ抜ける比叡山系越えの古道	○
94	京と丹波路往還 明智越・唐櫃越・老ノ坂	本能寺攻めの経路と伝わる古代からの道	○
95	因幡交流鉄の道 江浪峠	たたら製鉄と盛衰をともにした街道	原稿未着

中国			
96	智頭街道 志戸坂峠・鎌坂峠	宮本武蔵も通った山陽道と山陰道を結ぶ古道	原稿未着
97	伯耆大山 大山道	聖地大山が育んだ信仰と日本一の牛馬市	作成中
98	石見銀山街道	世界を動かしたソーマ銀を運んだ古道	○
99	石見街道 石浦峠・三坂峠・可部峠	軍道、浜田藩主の参勤交代、生活の道	要再検討
100	中郡古道	毛利輝元、山城から平城への築城の道	△
101	津和野街道 杉ヶ峠・生山峠	津和野藩を支えた道、語り継ぐ殉教の道	○
102	萩往還	明治維新を開いた道	○

四国			
103	別子銅山廃道	別子銅山の鉱石・粗銅・物資を運んだ道	△
104	四国八十八か所遍路道	「遍路ころがし」と結願への道	間もなく○
105	剣山表参道	西日本第2の高峰・剣山の古道	間もなく○
106	石鎚山表参道	ロープウェイ開通前のメインルート	△
107	梶原街道 葦ヶ峠	坂本龍馬脱藩の道、志士脱藩の道	○

九州			
108	対馬 佐須坂三里	元寇に散る、宗助国決戦の道	○
109	国東半島 祈りと修行の道	宇佐・国東半島の六郷満山文化に出会う	○
110	求菩提山古道	求菩提山は九州を代表する一大修験道場	間もなく○
111	英彦山古道	山岳宗教の一大拠点として発展	△
112	宝満山古道	人々に愛される歴史と信仰の霊峰、宝満山	○
113	背振山系峰入りの道	多くの修行僧が歩いた峰入りの道	△
114	阿蘇山古道	西巖殿寺修験者の道と外輪越えの峠道	○
115	椎葉村の霧立越・向霧立越	椎葉村から九州脊梁を越える交易路	△
116	霧島山 高千穂峰古道	天孫降臨神話が伝わる古代からの参拝道	○
117	薩摩街道高岡筋	幕末、志士たちが駆け抜けた薩摩街道	間もなく○
118	萩肥街道 椿山峠	領内のほぼ中央に関所を備えた山岳街道	△
119	屋久島「岳参り」歩道	島内の各集落から登拝した信仰の道	間もなく○
120	首里城をめざす道	琉球王国の栄華を今に伝える道	一部原稿未着
121	木曾路		△
122	上信国境の峠	信州から西上州へ一日十石の米を運んだ道	これから調査

○はすでにホームページで公開済み／△は地図ができれば完成／121、122は欠番になっている15などの差し替え候補

著者、新著を語る

『民族植物学入門』を上梓

京都・滋賀支部 山本紀夫

私は平成18(2006年)に、日本山岳会から「秩父宮記念山岳賞」を授与されました。そして、それを記念して07年3月に「登山・探検・フィールド・ワーク」地球の高みに向けて―(国立民族学博物館・日本山岳会など主催)を実施していただき、それ以来、登山と研究の両立に腐心してきました。

そのため、登山の経験を活かして、山岳地域で暮らす人々、いわゆる山岳民族を対象にした民族植物学という分野を開発し、アンデスやヒマラヤ、チベットの先住民社会における人間と環境との関係を研究することになりました。

幸いに、私が高校卒業後に入学した京都大学は「探検大学」と呼ばれるほど、研究者や出身者が登山

や探検の世界で活躍していました。参考までに、次のリストは1950年代の主な登山・探検・海外調査をまとめたものですが、この表からも京都大学出身者の活躍ぶりを知ることができるでしょう。

「1950年代の主な登山・探検・海外調査」

1952年・JACマナスル踏査隊(今西錦司隊長、中尾佐助ほか)／53年・JAC第1次マナスル登山隊／55年・京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊(木原均隊長、今西錦司、中尾佐助、梅棹忠夫ほか)／56年・JAC第3次マナスル登山隊(AACK会
員・今西壽雄が初登頂)。京都大学探検部が誕生、東部ヒンズークシ探検(本多勝一ほか)／57年・南極地域観測隊の越冬始まる(AACK会
員・西堀榮三郎隊長)／58年・京都大学によるアフリカ調査開始(今西錦司ほか)。チョゴリザ登頂(AACK会
員・桑原武夫隊長)。ブータン踏査(中尾佐助単独)。西
北ネパール探検隊(AACK会
員・

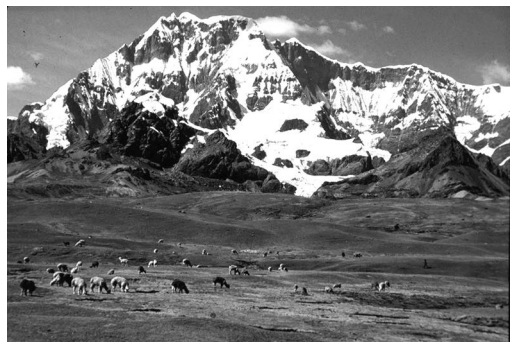
川喜田二郎隊長) (JACは日本山岳会、AACKは京都大学土山岳会の略称)

*

当時は海外に出かけること自体が極めて困難であり、その困難を乗り越えて京都大学の教官や研究者たちがヒマラヤへ、アフリカへ、そして南極へと出かけて行ったのです。だからこそ、京都大学は「探検大学」と呼ばれたわけです。こうして、68年に始まった私のフィールド・ワークは60回を超え、現地での滞在期間も13年余りとなりました。

本書『民族植物学入門―アンデスからヒマラヤへ』(京都大学学術出版会刊)は、こうした研究人生の中からアンデスおよびヒマラヤ・チベットを採り上げ、これら両山岳地域における農耕文化とともに、人間と植物の関係を明らかにしようとしたものです。特に世界最長の大山脈であるアンデスについては、自然環境の変化だけでなく、農耕文化や食文化による変化も大きく採り上げました。

アンデスは、インカ帝国をはじめとする諸文化によって環境が大きく改変されたことが知られています。こうした改変があったから



ペルー・アンデス高地におけるラクダ科家畜の牧畜(標高4800m)。このような高原はペルーでは「プナ」と呼ばれる

こそ、アンデスは世界でも稀に見るほどの高地でありながら多数の人々が暮らせる地域になったのです。これに匹敵するのは、チベットの一部地域しか知られておりません。

したがって、アンデスとチベットの高地での人々の暮らし方を明らかにすれば、人間の諸文化の特徴を解明する手掛かりとなり得ます。このような期待から拙編者はアンデスとヒマラヤ、そしてチベットの比較研究を実施したのです。本書によって、高地住民の暮らし方、ひいては高地文明の特徴を知っていたければ、私にとつて大きな喜びであります。



2025年12月刊、7200円(税別)

徳本峠クラシック・ルートに再び灯を 岩魚留小屋再生プロジェクト始動

塩湯 涼

忘れられていく歴史の道

かつて上高地への入り口は、バスの車窓から眺める釜トンネルの暗闇ではなかった。松本市安曇の島々集落に降り立ち、島々谷の沢音を聴きながら峠を越える約20kmの道のり―徳本峠越えのクラシック・ルートこそが、日本アルプスという美しき世界への真の玄関口であった。

英国人宣教師ウォルター・ウエストン、案内人の上條嘉門次、芥川龍之介や高村光太郎、そして日本山岳会発起人のひとりである小島鳥水。近代登山の黎明期を彩った先達たちが等しく汗を流し、その歩みの途中で羽を休めた場所がある。それが、島々谷南沢のかたわらにたたずむ「岩魚留小屋」である。しかし今、この130余年の歴史を刻んだ拠点が、静かにその命を閉じようとしている。

岩魚留小屋の歩み

岩魚留小屋の歴史は、日本の近代登山の変遷そのものである。1891(明治24)年に建築されたと推測されるこの小屋は、当初は登山者のための施設ではなかった。江戸時代、この道は「生活の道」であった。稲作が困難な島々や周辺集落の人々は、上高地で伐り出した木材を年貢として納めるため、柚木として徳本峠を越えた。岩魚留小屋の前身は、農商務省の宿舎であったとされる。近代登山が日本に根付く以前から、ここは山で働く人々を支える「里の延長線上」にある拠点だったのである。

大正から昭和にかけて、登山文化が花開くと、岩魚留小屋は多くの岳人を迎え入れる宿へと姿を変えた。1933(昭和8)年の釜トンネル開通によりメインルートの座を譲った後も、静寂を愛する登山者に親しまれてきた。しかし、2012(平成24)年に先代の小屋主が体調を崩して以来、小屋は休業を余儀なくされ、15年の歳月が流

れた。

私が初めて岩魚留小屋を訪れたとき、目の前にあったのは「廃墟」と呼ぶに等しい惨状であった。長年の積雪と風雨により建物は大きく傾き、土台は腐朽している。内部にはかつての生活用品が散乱し、時が止まったまま腐敗が進んでいた。

国立公園内という厳しい立地条件ゆえ、一度建物が倒壊してしまえば、現在の法規制下では再建は極めて困難である。135年の重みに湛えたこの建築が失われることは、単に1軒の宿が消えることを意味しない。それは、島々から徳本峠、そして上高地へと続く歴史の「線」が、物理的にも文化的にも断絶されることを意味している。

島々集落の再興を懸けて 再生プロジェクトを始動

私は1995(平成7)年に京都で生まれ、大学から社会人時代を



落ち葉に埋まる岩魚留小屋とカツラの大木

九州で過ごした。製薬会社での研究開発職を辞し、山への情熱から南アルプスの百間洞山の家での勤務、千枚小屋での支配人を経験してきた。現在は、縁あって島々集落へ移住し、山で働く人向けのシェアハウスや、登山者向けの宿「島々山荘」を運営している。

島々はかつて上高地への玄関口として活気に満ちており、現在も多くの山小屋経営者や関係者が居



整理した後の室内の様子。東面の寝室の一部

を構えている。しかし、限界集落が進み、衰退の途にある。移住者としてこの地に根を下ろすなかで、「島々をかつてのような日本一ワクワクする登山口にしたい」という想いが募っていった。その矢先に出会ったのが、岩魚留小屋であった。歴史あるこの小屋が地元の方々と登山者に深く愛されていることを知り、「このままこの小屋を終わらせてはいけない」という一心で、事業継承を決意した。2024年11月、志を同じくする仲間7人とともにプロジェクトを立ち上げ、本年2月には一般社団法人を設立するに至った。



全ての残置物を歩荷で荷下ろしした

昨年の活動は、困難の連続であった。4月から9月まで土砂崩落による通行止めが続き、現地調査すらままならない時期もあったが、登山道整備団体や行政機関との調整を重ね、秋には通行解除を実現した。

その後開催した「歩荷イベント」では、多くの参加者の協力により約2000kgに及ぶ小屋の残置物を、全て人力で撤去した。空になった小屋の中に立ったとき、ようやく再生へのスタートラインに立てたと実感し、感無量の想いであった。

今後の展望と「信飛トレイル」への広がり

今後の計画として、26年に浄化槽を含むトイレ整備に着手し、27年に建物本体の修繕、28年7月の営業再開を目指している。再生後の小屋では、囲炉裏を囲んで地域の食材を味わい、小屋番と宿泊者が山を語らう、まるで50年前にタイムスリップしたような温かな空間を目指したい。

また、このプロジェクトは単独のルートに留まらない可能性を秘めている。現在、松本から高山を結ぶ「信飛トレイル」の構想が進んでおり、岩魚留小屋はその広域ネットワークの重要な結節点となり得る。かつて柚人が国境を越えて行き交ったように、令和の時代に新たな人の流れをつくる拠点となるはずだ。

1軒の小屋という「点」を直すことで、街と山を「線」で結び直し、地域全体に「循環」を生み出す。そこそこが、私たちの掲げる再生の真義である。

日本山岳会の皆さんへ

山を愛し、山の文化を誰よりも

深く理解されている日本山岳会の皆様。岩魚留小屋の再生は、個人の夢に留まるものではありません。それは、先人たちが築き上げてきた日本の登山文化という至宝を、次世代へ手渡すための「責任」であると考えています。

135年前、険しい山中に礎石を置いた人々の想いに、いま一度光を当てたい。徳本峠の深い森に、再び小屋の灯がともる日を夢見て、私たちは歩みを止めません。

現在、この工事費の一部を募るため、クラウド・ファンディングを実施しております（26年3月29日まで）。岩魚留小屋の現状や詳細な展望をプロジェクト・ページに記しておりますので、「岩魚留小屋 クラウド・ファンディング」で検索していただければ幸いです。皆様の温かなご支援と、ひとりの「仲間」としての参画を心より願っております。

クラウド・ファンディングについてご不明な点などありましたら iwanadomegoya@gmail.com または080-1508-7477にご連絡ください。

（岩魚留小屋再生プロジェクト代表）

BOOK REVIEW

小説『登山大名』に描かれた
九重・大船山に眠る中川久清公

東九州支部 飯田勝之

書店に並んでいるその本の題名だけで、山ヤなら思わず手にしてみたくなる『登山大名』（2025

年10月、日本経済新聞出版刊）。九州の山ヤなら誰でも知っている、大船山中腹に墓のある入山公こと、豊後岡藩（7万石）の3代目藩主・中川久清公を主人公とした、諸田玲子作の物語である。

なお、私自身『山岳』第117年（2022年）に「大船山に眠るアルペン大名、中川入山（久清）公」と題して一文を寄せているので、そ

ちらも参照していただければ幸いです。

久清公にまつわる2つの謎

久清公と言えば岡藩で家老制や奉行制など、藩政基盤の確立をはじめ、師と仰ぐ熊沢蕃山を招いて得た幾多の教えを基に、灌漑や洪水対策、山林の育成などに努め、銃や大砲の訓練など武力の増強を図るなど、豪胆で先駆的な業績が、岡藩中興の祖と呼ばれる所以となっている人物である。しかし、この物語ではそれとは裏返しの人物像として描かれている。



中川久清公の肖像画

久清公には謎が2つある。肖像画として残っている、目鼻立ちなどどこか日本人離れした容貌と、彼は豊臣秀頼の落し子という、密かな伝説が残っていることだ。この2つが物語の裏面を貫いている。

大坂夏の陣も終わり、

徳川の世も4代目家綱の時代は、豊後岡藩は3代目久清の世である。久清が狩りをしているときに、曲者に襲われている娘を助けるが、彼がそのときの娘を忘れられなくなることから物語は始まる。

まだ若いころ、彼が生まれたとき取り上げたという侍医の池田伊豆一雲からは、生母は安威の方であると聞き、父からは、生母安威の方は松平忠直に仕えていることを聞いて、自分は父の子ではないのではないかと思うようになる。

一雲の娘佐代との出会いで、2歳年上の彼女と恋仲になり、佐代は彼の子を身ごもるが、一雲が忠直との文の取り交しが疑われて死罪となり、娘佐代は遠島となり、安威の方は自害する。

38歳のときに父久盛が死去、3代目藩主となり、父の墓のある碧雲寺に参った折、和尚から手水鉢の裏に彫られた聖母マリアの像を見せられ、久盛から密かに守るように命じられたと知る。豊後はかつてキリシタン大名と呼ばれた大友宗麟支配の地で、岡の前城主・



強力で担がせて久清公が乗った人馬鞍。竹田市歴史文化館蔵

志賀親次も切支丹であったなど、切支丹の影響色濃い土地柄であった。曾祖父清秀は切支丹で、マニラに追放された高山右近の従兄弟であった。祖父も父も切支丹には寛大で、領内の民を密かに庇護していた。

しかし、島原の乱以降、幕府の異教徒取り締まりによる弾圧は厳しさを加えている今、切支丹と関わりたくはないと彼は悩む。そんなあるとき、大船山に大勢の切支丹が隠れていることを知らされる。人馬鞍（写真参照）で担がれて山に登り、鳥居窪に潜んでいる切支丹の一同と出会って、彼らに害は加えないことを伝える。そして、そこで鳥屋山で救ったとき以来、忘れられない娘「らん」と再会する。そのらんとの間は愛が生まれるが、彼女は切支丹で、しかも祖父は司祭である。彼はますます



大船山中腹にある中川久清(入山公)の墓。バックは大船山

切支丹との関わりを深めていくことになる。

らんを側室として岡城に迎え入れるが、切支丹であることと、もうひとりの側室、お加智と折り合いが良くないことなどから江戸に同行する。切支丹のらんは江戸の屋敷で身を隠して暮らしているが、それもやがて密偵に知られるところとなり、家臣を付けて逃亡させるが、途中で追い詰められて自死する。

色を添える多彩な登場人物

外様大名の失策などを理由に次々と改易を行なう敏腕の「知恵伊豆」こと老中の松平伊豆守信綱。久清の脇の甘さを忠告し、危機をいち早く教えたり、ときには直に危機を救ったりする従兄弟で、大老にまで昇り詰めた酒井雅楽頭忠清。情勢の判断やその事態の裏の見方などを的確に指摘する、若き日に熊沢蕃山のもとでもに学んだ、ふた従兄弟で盟友の岡山藩主・池田光正。数千丁の鉄砲所有や鳥居窪で訓練しているとの情報に謀反を疑う幕府に対し、「西の守りは久清に任せればよからう」と言って庇う水戸光圀。一雲や娘の佐代や生母安威の方の悲劇の元凶となる松平忠直の存在など、多彩な人物が随所に登場する中で、ひときわ存在感を見せる人物が、なさぬ仲の母君万姫である。

だ、ふた従兄弟で盟友の岡山藩主・池田光正。数千丁の鉄砲所有や鳥居窪で訓練しているとの情報に謀反を疑う幕府に対し、「西の守りは久清に任せればよからう」と言って庇う水戸光圀。一雲や娘の佐代や生母安威の方の悲劇の元凶となる松平忠直の存在など、多彩な人物が随所に登場する中で、ひときわ存在感を見せる人物が、なさぬ仲の母君万姫である。

2代將軍秀忠の従妹で家康の養女の彼女は、久盛の正室となるが子がいないため、21歳のときに京で生まれた側室の子、8歳の久清を江戸に迎えて養育する。佐代の遠島に傷心の久清を叱咤する。らんを江戸に匿うために水戸光圀を動かす。遠島の佐代を匿って尼にし、その生んだ子をも隠して寺に入れる。乗り込んで来た密偵、將軍の従妹の言うことを信じないのか、と追い返す。忠清から中川の家を守るために隠居を奨められたときに、久清にそれを決意させたのもこの女傑である。

愛する女のために心労を重ね、迫害される切支丹を庇護しようとする久清と、その秘密を暴き改易を狙う幕府と、その意を受けた長崎奉行や隠密たち、徳川直属ながら職祿にありつけない、恩賞目当ての牢人たちなどを相手に、危機と隣合わせの渡り合いが繰り広げられ、彼はなんとか乗り切る。

息詰まるようなドラマ展開

物語の最後は大坂落城のとき、秀頼の子を宿した安威の方が密かに連れ出され久盛に託されたが、異人の容貌をした美貌の安威の方

が生んだのが久清であり、父久盛が中川の血ではなく、豊臣の血を残す自分を後継にしたことを知る。そして、彼は自分を中川の墓地ではなく、大船山の鳥居窪に儒葬するように遺書を残すという流れ。

史実に残る有名な人物をふんだんに登場させるなか、脚が不自由であった彼のその原因は、らんのために曲者と格闘したときの負傷としたり、四十人力の大男と記録にある梅右衛門を怪力で美貌、男装した異人の巨女、宇目大力として登場させたり、鳥居窪を舞台に幕府隠密と壮絶な闘いを展開したり、実は母の万姫も切支丹であったなどと、随所にフィクションを大胆に組み込んで、息詰まるような場面を展開させる壮大なドラマである。と同時に、歴史的資料をしっかり読み込んだと思われる作品である。

しかし、彼はたびたび大船山に登っているが、それは鳥居窪に砦を築いて軍事訓練をしたり、切支丹を守って戦うためで、「登山大名」と名の残るように、山に登って雄大な景色を眺め、「山を愛でる殿様」と記録にあるような場面は、ついにでてこなかった。

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(61)『わが登高行』上・下 (三田幸夫著・茗溪堂)

互井健悟

三田幸夫。この人物について知
つていという人が、今の日本に
どれだけいるだろうか。彼は日本
初のロッククライマーのひとりで
あり、穂高岳の「前」、「奥」、「西」、

「北」の呼称を定着させ、積雪期の
立山や剣岳にも初登頂している。
戦前の最も早い段階からシツキム
やパンジャブをその足で歩き、商
社員として駐在中のインドから、
遠征隊の派遣を督促する手紙を日
本の仲間たちに送り続けた。戦後
も準国家プロジェクトとも言うべ
きマナスル登頂計画の最初の遠征
隊を率いている。海外の登山史家
の間では今も高い知名度を誇るが、

国内のそれがいまひとつであるこ
とが不思議でならない。

三田の文章は実にいい。肩肘を
張ったところがなく、何よりも自
然で読みやすい。山で出会った
人々や仲間たちに向ける眼差しが
温かく、行間からもその優しさが
伝わってくる。どちらかと言えば
悪文の部類に入る大島亮吉の文章
でさえ、三田にかかれば天下の名
文となり、その評判が今も残った
背景には、遺稿集を編纂した豊辺
国臣の手腕もさることながら、三
田が折に触れてそう語り続けた影
響によるところが大きい。自身で
「ゴーチョク(剛直)」と紳名した鹿
子木貞信こぎまのぶに対しても、実のところ
は深く心酔し、後年、カンチェン
ジュンガ山麓にその足跡を訪ねて
いるところにも、彼の人柄がよく
表われている。

本書は、これより前に書かれた
3冊の著書と『アルプ』に掲載され

た「底倉記」などの雑誌記事、書き
下ろしの文章を上・下2巻にまと
めたもので、個人全集としての性
格がある。第二部「アルバータ遠
征」および第三部「インド時代」は
『山なみはるかに』と、第四部「マ
ナスル遠征」は『遠い山遙かな旅』と、
第一部「青春の山々」および第五部
「山の仲間たち」は『山のガキ大将
たち』と、それぞれ重複している章
が多く、各章の執筆時期も21歳か
ら79歳までの59年間にわたるが、
統一感を維持しつつどこからでも
読める手軽さを失わなかった点は、
島田巽と近藤信行による優れた編
集の賜物だろう。

いくつかの歴史的事象の主要当
事者であった三田が、人生の異な
る局面で、それぞれを別の角度か
ら回顧していく本書の構成には、
ある事象をより立体的に想起させ
る効果があり、後世の読者にとつ
ての資料的価値を一層高めている。
ここで、本書第二部に関連する
事項について少し触れておきたい。
100年前の登攀に関しては、故
ジョン・ミッドENDORFが遺作と
なった2023年の著書の中で当
時使用された装備の革新性につい
て論じたことを機に、絹ロープが

日本製であったか否か、あるいは
カラビナが使用されたか否かなど
について、改めて国際的な注目を
集めていた。それだけに、昨年の
本会による一連の行事の中で史実
の考証に関する新たな発信が皆無
であったことは、諸外国の研究者
を深く落胆させている。

また、YOUTH CLUB隊
の育成の趣旨を理解せず、参加者
たちに暗黙裡の重圧を加え、内容
も省みず単に登頂した事実だけを
もって「100年振りの成功」とは
やし立てた周囲の反応には、強い
違和感を禁じ得なかった。形骸化
した顕彰が、先人たちの偉業とそ
の情熱を継承する手段たり得るか
は甚だ疑問である。

100年前の登攀の事実上の公
式報告書は、本書でも言及された
『山岳』所載の三田の手記であり、
関係者の誰ひとりとしてこれに一
瞥もしなかった事実は、今の日本
の文化的貧困を如実に物語ってい
る。版元の廃業からすでに4年を
経過した本書であるが、今こそま
さに再版または文庫化が求められ
ていると言えよう。

(慶應義塾体育会山岳部OB・登
高会会員)



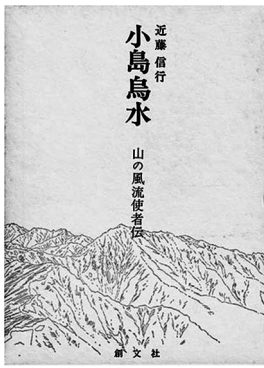
昭和54(1979)・55年初版発行

〔62〕『小島烏水 山の風流使者伝』 (近藤信行著・創文社)

荒井正人

日本山岳会の発起人のひとりである小島烏水(本名は久太)の評伝で、生い立ちから明治43(1910)年、37歳までの肖像である。著者の近藤信行氏は中央公論社で『中央公論』などの編集に携わった後、文芸雑誌『海』を創刊し、その編集長も務めた。同社退職後は文芸評論家として、あるいは山梨県立文学館館長として活躍され、この著作で大佛次郎賞を受賞している。

小島烏水については、いまさら説明を要しないかと思うが、それでも、本会の発起人のひとりであり、のち初代会長となったことは知られていても、その人物像はあまり知られていないのではないだろうか。ところが、烏水は単に当時の冒険的登山家として、あるいは山岳会の創設に尽力した人物と



昭和53(1978)年初版発行

してだけではなく、随筆家、文芸評論家などいくつもの顔を持つていると言って良い人物である。それだけに、幅広い活動を網羅して評伝として書くことが難しかったのだと思われ。

その点、著者は文芸評論家であり、烏水が登山家として名を成す以前の文筆活動を調べ、作品を読み込むことによって、いわば烏水のその後の人間形成や心の移り変わりを探ることを目指したと言えるのではないだろうか。評伝を書くことになったきつかけとして、後述の滝沢秋暁宛に書いた烏水の手紙55通を読む機会を与えられたことを挙げています。

ここで烏水の生涯を書くには紙面が足りないが、「あとがき」を基に簡単に書くならば、ざっと以下のとおりである。なお著作・執筆記事一覧はあるが、残念ながら年譜はない。

明治・大正・昭和にわたって、生涯の大半を横浜正金銀行の行員として過ごした。そのかたわら探検時代の北アルプスに登り、アメリカ

カ在住時代にはシエラ・ネバダなどにも足跡を残した。多くの著作には山岳人としての風貌が第一位を占めていて、山岳紀行や山に関する研究・随想が多数ある。しかし、そればかりではなく、『文庫』の編集に携わっていたころは気鋭の文芸批評や社会批評を書いた。また、美術品の優れた鑑賞者・研究者であり、浮世絵のコレクションでも知られた。

烏水は早くから少年文学雑誌『少年園』『少年文庫』の愛読者であり、投書家であった。その後『文庫』への投書で、掲載作品に批評を加える記者の目に留まることになり、滝沢秋暁という記者を知ることとなる。手紙のやり取りも多く、小島久太に「烏水」の雅号を勧めたのは、この滝沢秋暁である。その由来は「鶴の真似をする烏水カササギに溺る」。

人物評伝を書くことの難しさについて著者は「あとがき」で、このように書いている。《人間の一生は他者にわかるのだろうか、という不安にいつもつきまとわれている。(中略)要は私自身の小島烏水を書いてゆくほかはない。》評伝を書くに当たって著者が大

事にしていたと思われるスタンスとして筆者が感じるのは、腑に落ちない点は徹底解明する姿勢で、特筆すべきは槍ヶ岳登山における経路を実証すべく、霞沢へ2回にわたり踏査に出掛けていることである(芸報「山」1976年369・370号参照)。

併せて、烏水の気持ちを感じるために烏水が育った横浜の山王山地区をしげしば訪れていることである。その姿勢は、烏水がアメリカの支店長として在任していたサンフランシスコ、ロサンゼルスなどへも事績調査に出掛けていることにも表われている。

烏水が育った当時の横浜は、外国人居留地もあり、新しい文化の発祥地でもあった。進取の気概を持った青年、小島烏水だったからこそ日本山岳会設立にも尽力できたのではないかと思う。

補注も含めて450ページにも及ぶ大作であるが、創立120周年を迎えたこの機会に、多くの会員の皆さんにぜひ読んで欲しいものである。文庫版は平凡社から上巻1500円、下巻1700円(ともに税別)で出ている。

(図書委員会委員)



千田 早苗(ちだ・さなえ)

会員番号7211 永年会員
 1936年 仙台市に生まれる
 1961年 仙台市職員となり建設畑を歩く。市役所山岳会に所属
 1971年 日本山岳会入会
 1977年 台湾・玉山登山
 1984年 仙台市ヒムルン・ヒマール登山隊実行委員
 1991年 中国四川省・羊拱山登頂
 1995年 宮城支部副支部長に就任
 1998年 韓国・太白山、小白山登山副団長
 2000年 宮城支部チベット旅遊団長
 2001年 宮城支部長に就任
 2002年 中国・太白山、華山登山
 2025年12月28日 逝去、享年89

宮城支部の第6代支部長をされた千田早苗さんが昨年、年も押し詰まった12月28日、療養先の病院で心不全のため急逝された。89歳であった。それは奥様が亡くなられて、ちょうど1年後のことだった。亡くなられる少し前、甥御さんが病院へ見舞いに行った折には、盛んに山の話をしていて折に、今したいのは何にも増して山仲間に出たいと語っていたようで、近く退院できることを強く期待し

ておられたようである。千田さんは1936(昭和11)年、仙台市に生まれた。55年、仙台工業高等学校の建築科を卒業され、仙台の建設会社数社を経て61年、仙台市の職員となられた。その仙台市には、昭和初期に始まる永い歴史を持つ市役所山岳会があった。山岳会は戦後の自然指向と登山隆盛の時代にあつて、盛んに魅力ある登山を展開していた。自然や植物が好きだった千田さんは、市の職員になられると間もなく市役所山岳会に加わって山登りを始められ、登山の基礎知識と技術を身に

千田早苗さんのご逝去を悼む

柴崎 徹



付けられると同時に、生涯を通しての山仲間をたくさん得ることになった。

日本山岳会の宮城支部ができたのは58年5月で、その設立に少なからず寄与したのは、この当時の市役所山岳会の指導的立場にあつた方々であった。この方々の影響を受けて、その後たくさんの山岳会の人々が宮城支部に入会されることになるが、その先駆けとなつたのが71年の千田さんである。

千田さんは、宮城支部の行事や山行に欠かさず出席される常連であるとともに、さらに会員同士で小パーティを組んで、自分たちの登りたい山を自由に歩かれていた。特に遠藤昭二さんや高橋功さんと組んで登られた「宮城の一等三角点の山16座」の報告は、当時としては出色のものであつた。その後、その三角点巡りを東北全域に拡大して、他県の人々が知らないような各

県の珍しい山を、車を駆って登り歩き、その都度支部に貴重な報告をもたらしてくれた。このことは、宮城県の高い山々への関心を促し、「宮城百山」の選定に拍車を掛けることになったと思う。

その後、千田さんは、宮城支部

の副支部長を6年ほどされてから、第6代の支部長になった。日本山岳会が百周年を迎えようとしていた時期で、『新日本山岳誌』の編纂や「中央分水嶺踏査」などの記念事業が始まったところである。どの事業も千田支部長の下、支部会員を総動員して取り組まれ、無事に目的を達成された。

千田さんは、支部が計画した台湾や中国、韓国などの海外登山にも積極的に参加された。どの登山でもご自分の役割を果たされ、登山や旅遊の成功に貢献された。特に91年の中国四川省の羊拱山(5273m)では、初登頂者のおひとりになられた。これは千田さんの生涯の山登りに、大きな華を添える登山であつたと思う。

千田さんや私たちの年代は、高齢になつてから東日本大震災やコロナ禍の2つの災難に出遇うことになった。そのどちらも私たちに心えした。特にコロナ禍は、山仲間同士の出会いさえ一時期、著しく困難にした。千田さんとは、どんな近くの山でもいい、もう一度一緒に登りたかつたと悔やまれてならない。今はただ、千田さんのご冥福を祈るばかりである。

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

東京支部

セミナー「視覚障害者支援登山を知る」開催報告

1月29日(木)、東京支部は六つ星山の会の葛貫会長、柴田総務部長ほか清水山行部長、岡本総務部員の4名の方を本会104号室にお招きし、「視覚障害者支援登山を知る」セミナーを開催した。

六つ星山の会は、1982年、視覚障害者を友として互いに助け合いながら山登りを楽しむことを最大の目的として結成された。会員は今年の1月現在177名、そのうち71名に障害がある。

健常者がボランティアとして山登りをサポートするのではなく、「視覚障害者と山をとともに楽しむ」みんな同じという考えで、山行参加費は障害、健常の別なく自己負担、交通費、宿泊費などの実費も同じだ。

セミナーの初めに、パワーポイントの画面を使いながら、柴田総務部長から「見えても見えなくても山はすばらしい」というタイトルで、どのように視覚障害者と登山をするかの説明を受けた。

3人で1つのグループとして行動

「障害者1名を前と後から挟むように、2人のサポーターが縦に連なり、3人が1つのグループとして登ります。前サポーターは、障害者の前を歩きやすいように登山道を誘導していき、段差や足場の状況を言葉で伝えます。そして、前サポーターは絶対に後ろを振り向いてはいけません。振り向くと、後ろの障害者が方向を見失うため危険です。

弱視の障害者の方には、黄色のスパッツや白い布を身に着けさせるのも有効です。障害者は前サポーターのザックの後ろに着けたサ

ポートロープを片手でつかみ、もう一方の手にストックを持って登ります。

後ろサポーターは後ろから見て、前サポーターが言わなかったこと、特に足の置き方などを指示し、登山道から外れないように注意します

危険箇所の通過

「岩場はサポイトロープ、ストックを離して、サポーターの指示する手掛かりや足場を使って3点確保で上り下りします。幅の狭い登山道や木道は後ろサポーターの指示で進みます。階段は特に苦労する場所で、岩場よりも大変ですが、これもサポーターの指示で慎重に上り下りします。

徒渉の場合は岩の位置を伝えるのが難しく、水の中に入る方が安心して歩ける場合もあります。

ほかに登山道の杭、街中の車止め、濡れた鉄製のマンホールも滑りやすく危険です」

視覚障害は一つではない

「目の障害には、全盲とロービジョンとがあり、全盲であっても屋根がある所とない所の明るさの分

かる人もいます。ロービジョンにも様々な種類があり、人それぞれに違います」

そこで山行部長の清水さんが3種類のゴーグルを取り出して、どのように見えているのかの体験をさせてくれた。

(1)は視野狭窄で両目が極端に狭く、針の穴から見えているようだ。見えはするが、首を振らないと見えない。足元は特に見えづらく歩けない。

(2)は白内障で片目が白濁した摺りガラスのようで見えない。

(3)は弱視で片眼が見えなく、弱い視力はあるがとも見えづらいうという3種類であった

3種類のゴーグルを使い、実際に歩いてみた

受講生が2人1組になり、前サポーター役はサポイトロープの着いたザックを背負い、障害者役はゴーグルをしてザックのサポイトロープを持って歩いた。歩く方向の指示はクロック・ポジションと言って、時計の文字盤で指示。直進は12時、右斜め前は2時、右90度は3時、右斜めは10時というように指示された。



視覚障害の状況を知るためのゴーグル

全員がそれぞれを代わる代わる行なったところで時間終了、とても貴重な体験をすることができた。

安心して歩いて、おしゃべりできるのが良かった

最後に総務部員の岡本さんに六つ星山の会に入って良かったことをお聞きした。ちなみに、岡本さんは視力障害がある。

「私は左目を失明していて、段差が分かりません。特に登山道を降りるときは怖くて歩けませんでした。ところが、サポーターを握って歩くと安心でき、高い所からの下りも、トンと降りられます。また、なんといつても信頼できる人たちと、思いっきりおしゃべりできることがいちばん良かったことですね」とのことだった。

六つ星山の会の皆様、貴重なお話しと体験をありがとうございます。

た。
参加者16名、六つ星山の会4名、計20名
(飯田邦幸)

**埼玉支部
日本パラスポーツ協会「功労賞」受賞報告**

このたび埼玉支部が長年にわたる取り組みでできた「ふれあい登山」の活動に対し、令和7年度公益財団法人日本パラスポーツ協会より功労賞を拝受した。

「ふれあい登山」とは、一般社団法人埼玉県障害者スポーツ協会と共催で開催している事業で、故大久保春美氏(元埼玉支部長、本会元副会長)の「障害のある方にも、山の登り方やマナーを学びながら、山の楽しさや自然の素晴らしさを体験するとともに、障がいがあっても日常的なスポーツ活動の充実を図る機会を作る」との思いから始まった。

コロナ禍では実施が制限されたものの、2011年より現在まで継続開催され、26年4月で16回目を迎える。

なお、大久保さんは障害者のス

ポーツ活動の普及、発展に大変ご尽力されて、埼玉県障害者スポーツ協会では副会長を務め、さらには08年北京パラリンピックの際には、日本選手団の団長も務められた方である。19年より「大久保春美記念 ふれあい登山」と名称変更をした。

開催に当たり、支部の有志メンバーによる下見、ルート設定、グループ編成や開催方については協会と綿密に打ち合わせを重ねている。当日は、プロガイドや医師をしている支部員にも同行していた。危険な箇所はロープを張ったり、AEDを持参するなどして、参加した方たちが安全に楽しく登山をできるようにしている。

毎年の参加者は支部員、一般参加者を含め60〜70名ほどで、いちばん多いときは100名近くが参加したこともある。参加条件は埼玉県在住もしくは通勤・通学者で歩ける方、である。参加者の方の中には、登山のために1年間、リハビリに積極的に取り組んでおられた方もいる。「山が好きになった」、「また参加したい」、その言葉が何よりもうれしい。

支部員にも毎年楽しみにしてい

**寄附金および助成金などの受入報告
(令和8年1月まで)**

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
北澤 康一 会員	100	日本山岳会活動全般に対する寄附
土井 高夫 会員	30	永年会員からの寄附金
中西 豊和 会員	12	永年会員からの寄附金
江尻 雄一 様	5	日本山岳会活動全般に対する寄附

る方が多くいる。しかし、中には難易度が高いと感じて、参加を躊躇している方もいるが、勇気を出していき参加してみると、山の魅力や楽しさが再確認でき、毎回多くの学びがある活動だ。

「ふれあい登山」は参加者の皆様、協会の皆様、そして支部の皆様、全ての方の協力によって成り立っている。今後も安全かつ、全てのの人に山の楽しさを知ってもらうため、ともに楽しむため、大久保さんの遺志を継ぎ、次世代へとつなげていきたい。

最後に、本事業にご協力いただいた多くの皆様に、この場をお借

りして心より御礼申し上げます。
 (埼玉支部ボランティア委員会)

若林優子



図書紹介

柏澄子著

風の人 山野井妙子



2023年11月
 山と谷社 320頁
 四六判 1800円+税

「風」という言葉を辞書で引くと、「風がやんで波が静かになること」(三省堂国語辞典)とある。海や湖などの水面が風の影響を受けず、静かで波立たない状態を指し、天候が安定して風が吹かない状態を示す際にも用いられる言葉だ。

本書は、日本を代表するアルパインクライマー・山野井妙子の生涯から現在までの歩みを、丁寧な取材に基づき描いたノンフィクションである。山野井妙子を扱った

作品としては、夫である山野井泰史とのギャチュン・カン挑戦を綴った沢木耕太郎著『凍』(新潮社)が有名だが、彼女独りの半生に深く焦点を当てた作品は本書が初めてではないだろうか。読み進めるにつれ、なぜ彼女が「風」と表現されるのか浮き彫りになっていく。

本書は彼女の生涯から現在までの70年近い年月を1冊にまとめているが、近年の登攀記録だけでなく、登山を始めたころの山行記録などの古い出来事が、詳細なデータや同行者とのエピソードまで鮮明に記されていることに驚かされる。これは山行記録や日々の予定、金銭の収支などが書き込まれた日記や手帳、またパスポートが残されていたためである。手帳の記録などは冷静かつ客観的な目線で綴

られていたようで、本文には登攀ルートなどがそれほど詳しく書かれていないわけではないが、しかし、読んでみると一つ一つの山々の情景がリアルに目に浮かび、山への静かで深い情熱が伝わってくる。

彼女は山で仲間を失う事故や指を切断するほどの凍傷を負うなど、想像を絶する苛酷な経験をしているのだが、どんなに困難な挑戦であっても、家事や畑仕事など日常の延長線ではないのだろうかと思ってしまうほど穏やかでしなやかな生き方をしている。しかし、苛酷な山に挑み続けた彼女が、現在海が見える家に移り住み、彼女の人が「風(波が立たない静かな海)」と表現されるところに人生の妙味を感じずにはいられない。

本書は単なる一登山家の記録ではない。文面から感じられる著者の温かな眼差しは、彼女の純粋な心を浮き彫りにする。静謐な「風」の奥に潜む、山への尽きぬ憧憬と情熱、生命の輝き。その静かな感動は、読む人の心に深く穏やかに染み渡るはずだ。

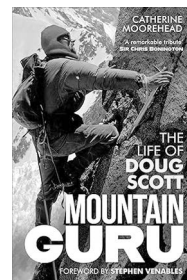
なお、本作は電子書籍版も販売されているが、購入の際はぜひ、「紙の書籍」をお勧めする。そして、

読む前に表紙を大きく広げてじっくり眺めてみてほしい。この本は、装丁から物語が始まっているのだから……。

(若林優子)

Stephen Venables 著

The life of Doug Scott, MOUNTAIN GURU



2023年12月
 Birlinn
 15cm×22cm 344頁
 €25

ダグ・スコットは、20世紀後半のイギリスを代表する登山家のひとりであり、1975年のエベレスト南西壁初登攀をはじめ、ヒマラヤ登山の歴史に大きな足跡を残した人物である。本書『The Life of Doug Scott, Mountain Guru』は、そうした華々しい登攀記録だけでなく、彼がどのような価値観を育て、登山を通じて何を考えるようになったのかを丁寧に描いている。登山歴の浅い筆者には、彼の登攀の凄さを技術的に評価することは難しいが、それでも読み進めるうちに、彼が多くの人から深く敬わ

れてきた理由は、少しずつ伝わってきた。

スコットの少年期は、戦後英国の比較的自由な環境の中にあった。父は警察官として多忙で不在がちであり、母は家庭を切り盛りしながら息子に強い関心を寄せていた。そのなかでスコットは外を駆け回り、ときに行き過ぎた行動も経験する。こうした自由と緊張の入り

電子版会報「川」の登録のお願い

会報のカラー版を電子版でお送りしています。発送費削減のためにご協力をお願いいたします。電子版を登録しても通知（メール）や電子版が来なかった方は迷惑メールなどを確認のうえ、再度登録をお願いいたします。

不明な点は、デジタルメディア委員会 (internet@jac.or.jp) にお問合せください。

【電子版への登録】

<https://jac1.or.jp/kain/>

2025040135272.html



混じった環境が、困難な状況にあえて身を置くことを厭わない性格を形作ったように思われる。また、父から受け継いだ身体能力や、道具を工夫し修理する実用的な技能は、のちの登攀や遠征を支える基盤となった。

本書で最も印象に残ったのは、77年のバインター・ブラック (The Black) での下山の記録である。世界最難関とされたこの山で、スコットは頂上直下で滑落し、両足首を骨折する。それでも下山を諦めず、嵐と極寒、食料不足のなかを、仲間を支えられながら氷河を這うようにして生還した。

極限状態にありながら、彼が語るのには恐怖よりも、不確実な状況を引き受ける覚悟であった。その言葉からは、英雄的な誇張よりも、現実を受け止める静かな強さが伝わってくる。

晩年のスコットは、コミュニケーション・アクション・ネパール (CAN) を設立し、学校や医療施設の建設、地域支援に30年近く関わった。彼は単なる寄付者ではなく、現場に立ち、石積みや修理に自ら手を動かし、人々の自立を支えようとしたという。その姿勢は、登山で

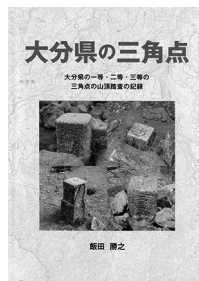
培われた価値観の延長線上にあったのだろう。登山で養われた判断力や現場感覚が、山を離れてからも失われることなく、別の形で活かされていた点が印象に残る。こうした生き方が、彼をネパールで「Mountain Guru」と呼ばれる存在にした理由である。

本書は、登山の本でありながら、人の歩みを描いた一冊として印象に残った。

(佐藤はるな)

大分県の三角点

飯田勝之著



2025年12月
飯田勝之 B5判 304頁
1819円+税

本書は、大分県下にある2420ヶ所余りの全三角点（一～四等）を踏査した著者が、四等を除く742ヶ所の三角点の踏査記録をまとめたもの。

著者はこれまで、国内と海外の多くの山に登ってきた。特に地元の大分県をはじめとする九州の山々には有名・無名を問わず登り

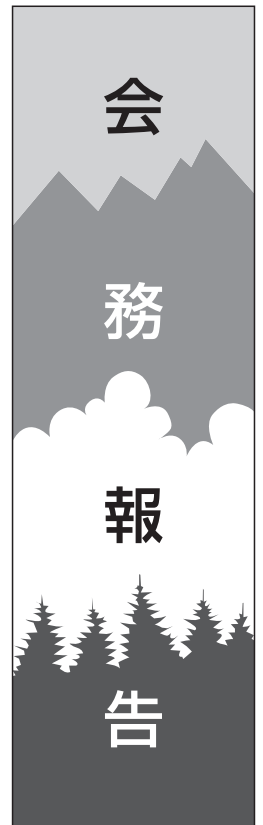
続けた。あるとき三角点踏査を思い立ち、足掛け13年を掛けて大分県の全ての三角点を対象として登り直し、記録することにしたという。

各記述項目は、踏査したルート、三角点の様子、設置されている方位磁石と磁石の関係、保護石の有無と数、三角点標識、付近の山頂の様子や山林・田畑・植生や地形、祠や墓などで、これらを三角点解説としてそれぞれ200字内外で簡潔にまとめている。各「点」の特徴を捉えた解説文は、臨場感にあふれており、確認作業の様子が伝わってくる。

また、場所によつては埋もれた石標を掘り起こしての確認作業となったり、地元民にキノコ泥棒と怪しまれ、警察に通報されたことなどの苦労話を、コラム的に挿入した「随想」に記している。

本書は三角点という「点」をコツコツと探査し、それらを結んで大分県の地勢と山を「面」として見事に表現した、と言ってよいだろう。ただし、この書を「登山ガイド・ブック」として利用しないように、との断わり書きがある。

(原邦三)



**令和7年度第11回(2月度)理事会
議事録**

日時 令和8年2月12日(木) 19時
～22時

場所 集会所およびZoom (オンライン)

【出席者】橋本会長、飯田・永田・柏各副会長、原田・猿渡・荒川各常務理事、池田・吉田・大塚・武川・片山各理事、石川・額賀各監事、(オンライン参加)梅田理事

【欠席者】望月・根本各理事

【オブザーバー】節田会報編集人、長島事務局長(書記)

【審議事項】

1・団体会員規定について(原田)
(賛成13、反対0)

1月理事会で承認された団体会員規程の表現を一部修正し、確定版とした。

2・賛助会員制度の改定について

(大塚) (賛成13、反対0)

規程について表現など細部について再確認し、承認した。

3・会報の電子配布に伴う手続きについて(原田) (賛成13、反対0)

会報の電子配布に伴い、紙での郵送を希望する会員からの郵送料の集金方法について決定した。郵送料の支払いも会費請求時に行なうので、支部連絡会などを通じて丁寧な説明が必要ということを確認した。

4・準会員制度の廃止について(原田) (賛成13、反対0)

準会員制度廃止の確認と受入れ停止時期について検討した。

5・令和7年度海外登山助成について委員会決定を承認した(柏)
(賛成13、反対0)

申請のあった2件のうち、「ジヤルキャ・ヒマール登山隊2022」に助成することが決まった。

6・永年会員への寄附依頼(永田)

(賛成13、反対0)

例年どおり永年会員への寄附を依頼することにした。

7・山岳祭補助金申請について(梅田) (賛成13、反対0)

北九州支部からの山岳祭補助金申請を承認した。

8・ソーシャルメディア利用ガイドラインについて(永田) (賛成13、反対0)

各種のSNSを利用する際に、本会、本会会員、および第三者の信用の低下や秘密情報を漏えいする行為を防ぐための指針となるガイドラインを承認した。

【協議事項】

1・創立120周年記念事業の精算について(猿渡)

2・令和8年度事業計画および予算についての委員会ヒアリング日程の調整(原田)

3・支部連絡会議(3月25日)の内容と担当者を決めた(原田)

4・日本山岳ガイド協会との連携について(永田)

ガイド協会と連携した講習会の実施について、予算計画、スケジュールを協議した。

【報告事項】

1・入会承認報告(橋本)
正会員10名、準会員3名の入会承認の報告があった。

2・退会者報告(事務局)
物故会員7名(永年会員4名、通常会員3名)、退会会員18名(通常会員15名、準会員3名)

3・寄附金受入れについて(猿渡)
寄附金4件、14万7000円の受入れ報告があった。

4・ザ・マナスル・デーについて(柏)
進行状況の報告があった。

5・外部からのKY講習の依頼(柏)
山岳地域で電気設備を保守点検する会社からのKY活動講習会(山岳地帯に関するリスクの認識)の依頼があり、打合せを行なったとの報告があった。

6・日本山岳会アプリについての意見(永田)
山岳会アプリについて公開していくとの報告があった。利用にはJACCAアカウント*でのログインが必要。

*アカウント発行は事務局へ依頼する。

7・北アルプス展望美術館での日

本山岳画協会展示会の名義後援
(原田)

名義後援の承認をしたとの報告
があった。

8・JMSCA表彰式および新春
懇談会(飯田)

飯田副会長から右記の会合への
参加報告があった。

9・都岳連「新春の集い」(柏)
柏副会長から右記の会合への参
加報告があった。

【その他】

「山」2月号の進捗状況(節田)

ルーム目誌 2月

2日 緑爽会

「会員優待サービス」変更の
お知らせ

〈会員サービスWG〉

本会報1月号に同封した
一覧表から、左記のような変
更がありましたのでお知ら
せいたします。

*【東北北部】酸ヶ湯温泉旅
館

*【北アルプス】大日小屋
右2件とも先方の都合によ
りサービスを終了しました。

3日	理事会 広報委員会 スケ ッチクラブ
4日	山行クラブ
5日	常務理事会 YOUTH CLUB委員会 山岳地理 クラブ
6日	入会説明会
9日	アルパインスキークラブ
12日	理事会
13日	図書委員会
16日	総務委員会
17日	総務委員会(グッズ) 麗山 会 バックカントリークラブ
18日	募金委員会 東京支部 三 水会 山遊会
19日	科学委員会 東京支部 み ちのり山の会
20日	自然保護委員会 クニ塾
21日	アルピニズムクラブ
25日	子どもと登山委員会 YO UTH CLUB委員会
26日	理事会 記念事業委員会 (グレート・ヒマラヤ・トラ パス) 緑爽会
27日	記念事業委員会 2月来室者 242名
物故	会員異動
澤登均(6301)	25・12・28

石井忠雅(8143)	25・4・17
退会	
市根井孝悦(7905)	北海道
山口俊成(10894)	
鳥田笑美(11840)	宮城
永嶋純子(11888)	
藤田壯二(12952)	東海
池本順平(14172)	石川
柳瀬美喜夫(14340)	東海
西田均(15301)	京都・滋賀

INFORMATION

INFORMATION

◆第3回 岡野金次郎碑前祭のお
知らせ

神奈川支部

岡野金次郎は1902年に小島
烏水(のちの日本山岳会初代会長)
とともに槍ヶ岳に登頂。この快挙
とともに日本における近代登山の幕開け
と呼ばれています。また、日本山
岳会設立に際しても多大な功績の
ある恩人です。晩年は平塚市で過
ごし、歿後の61年、平塚市により
湘南平に顕彰碑が建立されました。

佐藤止樹(15608)	熊本
奥山麻由(15611)	
久留井良重(16335)	広島
仲井照雄(16929)	京都・滋賀
波多野哲也(16944)	東海
東 蒼生(16989)	千葉
大場由実子(17129)	岩手
宮本尚登(17147)	東京多摩
計倉啓吾(A0633)	

岡野金次郎生誕150周年に当
たる2024年5月25日に第1回
岡野金次郎碑前祭を開催しました。
今年はそのとおり、第3回岡野金
次郎碑前祭を開催いたします。

日時 5月9日(出) 午後2時30分
〜3時40分(雨天中止、小雨
決行)

会場 平塚市湘南平 岡野金次郎
顕彰碑前

式次第(予定)
主催者挨拶 神奈川支部長

図書受入報告(2026年2月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
松見真宏 編著	山の仕事ガイドブック：大自然と向き合う30人の現場案内	320p/19cm	学芸出版社	2025	出版社寄贈
佐々木俊尚	フラット登山：歩くを楽しむ、自然を味わう	448p/19cm	かんき出版	2025	個人寄贈
山川陽一	想いを形に	120p/26cm	山と溪谷社	2026	著者寄贈
山岸尚将	クラッククライミングメソッド	160p/26cm	山と溪谷社	2026	出版社寄贈
坪田敏男/佐藤喜和/山崎晃司	クマとともに：ホッキョクグマ・ヒグマ・ツキノワグマの未来	210p/20cm	東京大学出版会	2026	出版社寄贈

来賓挨拶Ⅱ平塚市長、日本山岳会会長
 山岳会会長
 献花Ⅱ平塚市長、岡野氏ご子孫挨拶
 講演Ⅱ岡野金次郎について
 「岡野・小島コンビの槍ヶ岳への道」節田重節氏、小島烏水氏ご子孫挨拶
 合唱・フルート演奏Ⅱ平塚合唱連盟、神奈川支部会員
 路線バス利用Ⅱ(往路)平塚駅北口(3番乗り場)発13時13分 湘南平着13時36分
 (復路)湘南平発16時45分
 平塚駅北口着17時08分
 連絡・問合せ 神奈川支部・中島 090・7739・5634
 a.toukoku@gmail.com

訂正

*会報2月号8ページ4段目の9行目「カナダ山岳会マイケル・モーターマー氏(元UIAA副会長)」とあるのは、「元会長」の間違いでした。訂正してお詫び申し上げます。

(国際交流プロジェクト)

◆編集後記◆

● 信州の鎌倉と呼ばれる塩田平を圍繞する独鈷山や子檀嶺岳、夫神岳は過去に登っていますが、上田市北方の山には登っていませんでしたので、太郎山(1164m)に登ってきました。天文年間、村上義清支配下の上田盆地には「村上連珠砦」という砦群が配備されていました。花古屋城跡がこの山麓に残っていました。

● 三丁目の登山口から二十四丁目の太郎山神社まで、丁石の数が減るのを楽しみにひたすら登り、山頂に立つてびつくり！白馬岳から穂高連峰まで、白銀の大パノラマが待っていました。さらには美ヶ原、霧ヶ峰、蓼科山と八ヶ岳連峰、そして富士山までうつすらと、適当に名前から選んだ山でしたが、思わぬ拾い物でした。(節田重節)

日本山岳会会報 山 970号

2026年(令和8年)3月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
 編集人 節田重節
 E-メール: jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社